

青梅市文化財ニュース

第217号

平成17年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

自動車に衝突したオオコノハズク

フクロウの仲間に、オオコノハズクという鳥がいます。全身が茶褐色で、大きさはハトより一回り小型です。頭には耳羽があり、丸い目は澄んだ赤橙色です。鳴き声には変化がありますが、低く沈み込むような、「フオゥ、フオゥ」という声をよく聞きます。青梅市内の山林には一年にわたって生息していますが、個体数はあまり多くありません。フクロウの仲間は全て肉食性の猛禽ですがオオコノハズクは体が小さいので、大型の昆虫類を中心とした小動物が主食とされます。そのため、冬になると食べ物の豊富な暖かい地域へ移動する個体もあるようです。昆虫類などの活動が鈍る寒い季節の夜、こうした鳥たちがどのような採食活動をするのか興味があります。

平成16年（2004）12月16日の午前1時頃、市内梅郷の神代橋付近で1羽のオオコノハズクが通行中の自動車にぶつかり、衝突死しました。この鳥は郷土博物館に届けられ、所定の手続きを経た後、専門業者によって剥製にされ、博物館に展示されています。業者の計測で、全長22.7cm、翼長18.3cm、体重220gと記録されました。ほぼ平均的な大きさといえます。



博物館のオオコノハズク

(裏面に続く)

鳥の剥製を作るときには、皮や毛皮以外の胴体部は不要なものとして取り除かれますが、その際（平成17年3月中旬）、博物館の厚意で、この胴体部の胃の内容物を調べることができました。胃部を切開すると、未消化物が約2.5cm×1.5cmの固まりになり、ぎっしり詰まっています。恐らく、この未消化物はある程度溜まると、口から吐き出されるものと思われます（こうして口から吐き出された未消化物の固まりを『ペリット』と呼びます）。この固まりをほぐしていくと、次のような生き物の一部分が拾い出せました。



- 大型のクモ類（4個体以上）→写真左上
- カマドウマの脚部（多数）→写真右上
- 大型のアリと思われる頭部（5個体以上）→写真右下
- イモ虫状の昆虫類の幼虫（3個体以上）→写真左下

などで、他は細かな粉碎物です。腸内には黒い液体状の消化物が残されていました。胃の内容物を見る限り、この鳥は空腹の状態ではなかったようです。

また、生殖器（精巢、卵巣など）を調べると、個体の雌雄も分かります。しかし、鳥の生殖器は繁殖期以外は小さく収縮していることが多く、雌雄の判別は難しいともいわれ、この鳥についても明確な生殖器官は確認できませんでしたが、恐らく雄ではなかろうかと推定されました。

胃内容物の状態から、冬季（12月）ではあるものの、かなりの数の昆虫類（クモ類）を補食していることが窺えます。寒い季節の夜ですから、昆虫類が活発に動いている可能性は低そうです。オオコノハズクは、動いている獲物に襲いかかるだけではなく、木の皮の下や落ち葉の下で越冬している昆虫類を、積極的に探して食べているのかも知れません。今回のように、胃の内容物を直接調べられる機会は多くはありませんので、ふつうはペリットを調べることが、それに代わる手段となっています。

（文責 櫻岡幸治）